



ピンチをチャンスに

印西市立高花小学校長 たかつか 高塚 けいこ 啓子



1 はじめに

本校は平成3年4月、原山小学校から分離し、船穂小学校から通学区域を一部変更して、印西町立高花小学校として開校し、今年度創立30周年を迎えた学校である。

地理的には千葉ニュータウンの南部に位置し、ニュータウン事業前は山林原野であったが、事業の伸展とともに宅地が造成され、現在のように住宅地が形成された。そのため、市外から転入してきた住民が多い。また、北総開発鉄道株式会社（当時）による鉄道路線の開設により、開校数年は学区の住民の増加が見られた。児童数は、平成7年度の874人をピークに緩やかに減少し、近年は300人を少し上回る程度である。

保護者の教育への関心は高く、高花小保護者と教職員の会（高花会）を中心に、環境美化活動や交通指導等、学校の教育活動に協力的である。また、地域の高齢者による見守り活動や放課後支援、自主防災組織の構築等、地域住民と学校とのつながりも深い。明るい児童、建設的な意見交換を教育活動に活かしている教職員、そして協力的な保護者・地域に囲まれ、校長として学校経営を進めている。

今年度は、新しい「学習指導要領」を踏まえ、教育目標を「社会の変化に対応できる心豊かで心身ともにたくましい子供の育成」と設定した。

2 大きな変更と改革を迫られた教育活動

昨年度末から、学校はこれまで経験したこ

とのない時間を過ごしている。2月に入ってから感染症予防対策、そしてその後から続く臨時休校。学校運営の中で、これほどのことに直面することになるとは、誰が想像できたであろう。

このような中であって、子供たちの心とどう向き合えばいいのか。今後の教育活動をどのように進めていくのか。また、学校が意図することを、保護者・地域にどのように発信していくのか、年度末と年度初めの臨時休校の中で、学校そして私は、大きな変更と改革を迫られることとなった。

(1)互いを思いやる「橋渡し」の取組

3月は、児童にとって自他の成長を認め合い、周囲への感謝の気持ちをもちながら、次のステップに向かう大切な時期である。また、教職員にとっても、年間の取組について教育活動全体を振り返り、成果と課題をまとめる時期であり、学校全体が一年間の締めくくりを行う時期である。

しかし、今回は違った。そのようなことを十分することなく、臨時休校という形で学年の終わりを迎えたこと。特に、6年生は、小学校生活最後の一か月、学級や学年、下級生と最後の思い出を作ったり、感謝の気持ちを伝えたりすることが出来ずに、卒業という大きな節目を迎えたことは、どれだけ児童の心を揺るがしたことか。

卒業式は、児童の心に「思いやり」や「感謝」を育むために最も重要な行事であり、本来であれば、下級生も参加して、卒業生の姿

に、祝う気持ちと感謝の気持ちを向けさせたいところである。今回は、従来どおりの式は叶わなかったが、内容や時間、参列者を縮小して実施できる運びとなった。そこで、児童の思いをつなげるために、卒業生と下級生の思いの橋渡しについて、教職員間で共通理解・共通実践をし、以下のように取り組んだ。

①縦割り班の写真掲示

在校生（式には参加しない）と一緒に活動した、思い出の強い縦割り班の写真を掲示

②職員席を分散

来賓席側にも職員が着席し、会場全体での祝いの雰囲気を出す

③在校生の曲による退場

本来在校生が合唱する予定だった曲を、退場曲とする

④卒業生の合唱で修了式の入場

卒業生が式の当日歌った曲を録音し、修了式の入場曲とする

(2)臨時休校中の課題に対する共通理解

新年度はスタートしたが、始業式では翌日からの臨時休校を子供たちに告げることとなった。教職員の異動により学級担任の半数が転入職員であったため、職員間の共通理解をどう図るか、保護者へはどのように伝えるのか、休業中の課題の持ち方・伝え方はどうしたらよいかについて、教務主任と学年主任を招集し話し合った。そして、決めたことを、目的と内容を明確にして家庭に配付するとともに、Webサイトにも掲載し、周知を図った。以下は、家庭への配付文書及びWebサイト掲載文書の一部である。

来週以降（4/13～5/1）の学習課題について

来週以降に取り組む学習課題についてお知らせいたします。
最優先は、お子様や周りの人の命を大切に

する行動ですので、体調等を見て取り組んでいただければと思います。よろしくお願いいたします。

学習課題を考えるにあたって本校で大事にしたことは、お子様が見通しをもって主体的に学習に取り組むこと、そして規則正しい生活のリズムをつくることです。

始めに、一週間または一日の予定を立ててみることをおすすめします。

学習の時間帯を次の3パターンと学習内容を（例）として提示いたします。

1 学習の時間帯 3つのパターン (A・B・C)

	(A)	(B)	(B)	(C)
午前		④日記を書く ⑤新聞を読む		①読書 ②漢字ドリル
午後			③音読	④体力づくり
	午前1つ 午後1つ	午前2つ 午後フリー	午前フリー 午後2つ	3つ以上 計画する

2 学習内容

(みんなにやってほしいもの)	(挑戦してほしいもの)
①国語 (漢字) ドリル ◀前の学年の復習ページ▶	①読書 ②漢字ドリルの新出漢字をなぞる ③新聞を読む ④日記を書く ⑤テレビの教育番組を見る ⑥千葉県のホームページから ちばっ子チャレンジ100の復習プリントを ダウンロードして解く ⑦印西市教育センターのホームページから 様々な団体が無償で提供している教材を解く ⑧絵をかく
②算数 (計算) ドリル ◀前の学年の復習ページ▶	
③音読 ◀いろいろな教科書で▶	
④体力づくり ◀なわとびなど▶	

3 おわりに

この数か月は、新型コロナウイルスの感染拡大防止を前提にした取組や、臨時休校にどのように対応していくのかなど、校長として学校の在り方を模索する時となった。経験したことのない事態への対応や、日々の教職員に対する指導や助言という活動を通して、改めて校長のリーダーシップについて考え、その重要性を認識することができた。

「リ・スタート」となった令和2年度であるが、私は、これからも、教職員が子供たちのことを思いながら一丸となって、この困難をチャンスに変え、一つ一つの壁を乗り越えていくような学校運営を実践していきたい。



「子供たちを核とした持続可能な地域社会の絆づくり」を目指して ～学校における教育環境づくりを通して～



八千代市立萱田小学校教頭 向 智広 むかい ともひろ

1 はじめに

私の勤務する萱田小学校は、木々が生き茂り、広い花壇があり、ポニーやヤギ、羊、ウサギなどの動物がいる。学校内は、壁がない教室、自由にパーテーションで区切ることのできるオープンスペースがあり、そこには子供たちが座って活動できる広い机がある。本当に、『ボルピィ物語』の中にでてくる世界のように、見れば見るほどワクワクする学校である。私は、着任初日、言葉では言い表せない可能性を感じたのを今でも覚えている。

私はこの一年、地域の方々や保護者との連携と人材の活用、ICT教育充実、そして萱田小学校に眠っている資源の再生に全力で取り組んできたつもりである。以下に、その一端について紹介させていただく。

2 地域の方々や保護者との連携・人材の活用について

(1) スクールガードの方々との関係づくり

昨年度は、スクールガードでお世話になっている方々を「一年生を迎える会」や「歌声集会」に招待し、子供たちの歌声を楽しんでいただいた。さらに、PTA主催の「スクールガードの方々を囲む会」を開催し、保護者が感謝を伝えたり、情報共有を図ったりした。今後は各人の写真を校内に掲示するなどして子供たちが名前を呼んで挨拶できる関係にまで進められたらと考えている。お世話になるだけではなく、子供たちの活動を楽しんでもらう。そのような双方向の関係づくりを行っ

ていきたいと考えている。

(2) 学校地域支援本部（萱田ポラリス）との連携の強化

本校には、学校地域支援本部（萱田ポラリス）があり、いろいろな場面で子供たちの支援をいただいている。具体的には、植物栽培指導、クラブ活動、総合的な学習の時間での授業支援である。植物を育てる活動では、その育て方や、植え方、畑づくりなどの指導をいただいた。教頭である私は、学校と地域人材のつなぎ役として、職員の要望を集約したり、打ち合わせに入ったりして、地域人材を活用した学ぶ場を提供している。

(3) 萱小ファンクラブ（萱小FC）の設立

教職員の若年化が課題となっているが、上記の萱田ポラリスやボルピィ会をはじめとする学校に協力してくれる地域人材は高齢化が課題となっている。そこで、PTA会長の力を借り、「子供が卒業しても萱田小学校とつながり続ける」をコンセプトに萱小ファンクラブ（萱小FC）を立ち上げ、保護者や児童、地域の方々ボランティアで本校に関わるという活動を昨年度の2学期よりスタートした。現在は、飼育している、ポニー、羊、ヤギ、ウサギの学校休業日の世話や、小川・池、太陽光発電を復活させるなど学校環境の整備等を行っている。今後は、萱田ポラリスとともに、学習支援にも活動の範囲を広げてもらえるよう働きかけていきたいと考えている。

今後も、(1)から(3)までの活動を中心として、地域や保護者の方々と「子供たちを核とした

持続可能な地域社会の絆づくり」を進めていきたいと考えている。

3 ICT教育の充実をめざして

八千代市では教育環境システムの更新が行われた。これに伴い、昨年度は、保護者のシステム体験と、児童が授業でタブレットを含む教育環境システムを活用することを目的とした職員研修を行った。

(1)保護者の八千代市教育ネットワークシステムの体験

私が講師となり、保護者に八千代市の教育ネットワークシステムやプログラミング教育について体験する場を設けた。保護者は、子供たちが使用しているタブレット端末を使用し、「知恵たま」「マーナビ」「古典的な迷路」「スクラッチ」を体験した。保護者は意欲的に参加して下さった。このように、授業という形で保護者との関係づくりを行っていくことも一つの教育環境づくりだと考えている。

(2)校内研修会の充実

外部講師を招き、授業で活用できるICT機器活用研修を行った。また、情報主任が県主催の外部研修や八千代市教育センターの研修で学んだ内容を職員に伝達するという研修を行った。1学期までは、探究学習が主なタブレット端末の活用方法であった。2学期に入り、パワーポイントで提案資料を作成し発表するといった活動やプログラミング学習の一環として古典的な迷路やスクラッチ、ジャストスマイルを使ってのアニメーションづくりを行う様子が見られた。

4 ボルピイの森再生からSDGs実現を考える

私の着任時、学校の中には止まってしまっているたくさんもの（資源）があった。まず、これらを復活させたいと考えた。

初めは一人でのスタートだった。しかし、職員、子供たち、そして地域の方々が一緒に活動してくれるようになり、加速度的に資源の復活は進み始めた。

学校の周りの花壇にきれいな花が咲き、伸び放題だった木の枝がなくなり、風が通り、光が差し込むようになった。生け垣のつつじが整えられ、そこからボルピイの森掲示板が姿を現した。ずっと止まっていた本校のシンボルである柱時計が時を刻み始めた。池の水をすべて抜き、底にたまった泥を取り除き、掃除をし、循環ポンプを修理したことで、大きな鯉が泳ぐ姿を見ることができるようになった。子供たちは鯉にえさをやったり、小川に葉っぱを流したりして楽しんでいる。屋上にある壊れた太陽光発電装置を修理し、発電を再開することにより、毎日の二酸化炭素の排出削減量を見ることが出来るようになった。動物たちが食べ残したご飯や糞を使って堆肥作りを始めた。落ち葉を集め、腐葉土作りも始めた。捨てればゴミ。しかし使えば資源である。これらはすべて、もともと萱田小学校にあった資源。私たちは、その環境を再生させただけだ。このボルピイの森とそこに住む動物たちとの営みが、陸の豊かさを守ること、川や池、魚に親しみ守ること、クリーンなエネルギーを使っていく必要性、工夫次第でゴミは資源となり、資源を循環させることができるということ子供たちに教えてくれている。

28年前、きっと本校の諸先輩方は、動物たちにえさをやったり、触れ合ったりしながら、すでにSDGsを意識した教育活動を考えて行っていたのだろう。このボルピイの森に込められた想いを大切にしながら、これからも教育環境づくりに取り組んでいきたい。



全ての人が幸せになれるように 関わる



山武市立成東東中学校教諭 ありはら 在原 とおる 徹

1 はじめに

本校では、学校教育目標の具現化に向け、全職員が主体的に業務を遂行している。私は校長の背中から、全ての人が幸せになれるように関わることの大切さを学んでいる。

本稿では、職員が自分の持ち味を最大出力できる環境の整備について、教務主任の視座から紹介する。

2 教育計画の立案

(1)外部人材の活用

社会に開かれた教育課程を通じて、生徒の「よりよい社会を創る力」の育成を目指している。昨年度、招聘した外部指導者は10団体にのぼる。特に、NPO法人企業教育研究会の「いじめ防止啓発授業（1年生）」と千葉地方裁判所の「模擬裁判（3年生）」などは、生徒も教職員も満足度の高い授業となった。

優れた指導技術を持つ外部人材の活用は、生徒の成長効果を高めるだけでなく、教職員の負担軽減にもつながる。

(2)引き算思考

教育課程の編成にあたっては、授業時数を確保するためにも、行事を精選し無駄を省く必要がある。

教育課程の編成は、全職員のアンケートと校内委員会の議論を経て行っており、その際、行事の規模は縮小するが内容は充実させるという「縮充」の視点で年間行事を調整している。生徒に有用と思われる行事も、栄養過多では消化不良を起こしてしまい、機能不全に陥る危険性がある。そのためにも、日々の業務改善における引き算思考は欠かせない。

3 連絡と調整

(1)ICT機器の積極的な活用

生徒と向き合う時間の確保のため、校務支援のデジタルソフトを駆使し、以下の取組を推進している。

- ①会議のペーパーレス化（印刷時間の短縮）
- ②情報のデータ共有化（打合せ時間の短縮）
- ③教材のデジタル化（教材準備時間の短縮）

また、本年度は、通知表の所見を止め、毎日全職員が生徒の成長で気付いたことを、デジタル個人カルテに記録することとした。

全員評価者の体制を校内で構築し、全職員の業務量が公平となるよう調整を図りたい。

(2)協働と分業

全校規模の業務では、舵取りの中心となる。中でも協働と分業の事業仕分けは、全職員への連絡と調整が必要となる。「苦手分野は協働・得意分野は分業」にすれば、全職員が自分の持ち味を最大出力できる環境に近づく。

「誰かがやる」ではなく「誰もがやる」組織への変革は、業務の効率化を後押しする。

4 おわりに

本校では近年、生徒数に連動して職員数が減少してきている。これまでどおりの教育計画や指導体制では、職員が疲弊して学校の機能を低下させる。教育計画の立案は、生徒の成長のみならず、生徒と職員の双方を幸せにするという視点を忘れてはならない。

教務主任の職責は重いが、換言すればこれほど革新的で創造的な職務はない。全ての人々が幸せになれるように関わることの大切さを胸に秘め、今後も学校を動かす力を磨きたい。



初任者研修を通して

横芝光町立上堺小学校教諭 うちだ ゆうすけ
内田 佑介



昨年度、5年生の担任として教員生活が始まった。これまでに講師経験はあったものの、初めての学年、初めての校務分掌などで見通しがもてず、慌ただしい日々を過ごしていた。悩むことも多々あった中、一年間やってこられたのも明るく元気な子供たちとたくさんの先生方のご指導あつてのものだった。ここで、一年間の初任者研修を通して、特に勉強になったことを紹介したいと思う。

初任者研修では、各教科の教材研究の方法や授業づくり、学級経営、いじめや不登校の対応などについて実践を交えながら幅広く学ぶことができた。特に興味をもったのは「ICT機器の活用」であり、授業での活用方法やプログラミング教育の進め方であった。それをもとに、電子黒板やタブレット端末などの効果的な活用方法を授業に取り入れるようにした。その結果、子供たちが生き生きと授業に取り組む姿が見られるようになったり、授業時間を効率よく使うことができるようになったりした。今後もICT機器を活用した効果的な指導について個人研修を積んでいくつもりである。

初任の一年間でたくさんの改善点に気付くことができた。2年目は長期的、短期的な視点を持ち、子供たちのために何ができるのかを常に考えながら、子供たちと共に成長していきたい。



初任者研修を終えて

富里市立富里中学校教諭 たかだ しゅんすけ
高田 俊介



一昨年度、講師として学級を受け持ち、昨年度は同じ学校に初任者として着任し、同じ学年の副担任となった。担任のサポートを行いながら、アンテナを高くし、学年全体を見なければいけない副担任という立場は、私にとって非常に有意義な一年間であった。一年を通して、子供たちの変化にいち早く気付くということを意識したが、その小さな変容に気付くには子供たちと同じ目線で接していくことと、子供たちと一線を引いて接することを両立していかなければならず、それが難しい場面も多々あった。しかし、周りの先生方と連携しながら一つ一つ良い方向に進めていけたのは、私にとってとても力になることだった。特に、私が担当した職場体験の発表会や予餞会では、「どのような指導をしていけば子供たちが主体的に動き、子供たちで作上げた会にできるか」と先生方と模索しながら行い、それが成功したときの達成感は計り知れないものであった。校外研修では、他校研修や他の先生との情報交換の中で、多くの先生方から授業の展開の仕方や学級経営の方法などの話を聞くことができ、今後、「どうすれば子供たちにわかりやすく伝えられるか」、「何が子供たちのためになるか」などを考える上で、有意義な時間を過ごすことができた。

初任者研修が修了し、教員2年目がスタートした。研修や日々の生活の中で多くのことを学んだ一年間を忘れずに、日々「子供たちのため」を思って、これからも精進していきたい。



子供の心に火を点ける理科授業を目指して

鎌ヶ谷市立道野辺小学校教諭 よこやま けんた 横山 健太



はじめに

教師として小学校に赴任して10年目。自分なりに工夫をして、失敗もしながら夢中で歩んできた毎日だったが、授業が上手になりたいという思いは今も変わらない。そして、もう一つ、心に強い思いをもちながら授業を行っている。それは「子供たちの心にどうやって火を点けようか。」ということだ。どの教科、どの活動を行うにしても、受け手である子供たちのやる気が大切であり、それによって教育効果が格段に高まっていくと実感しているからだ。ここでは、「子供たちのやる気を引き出す」ために、私が理科授業において心掛けていることを五つ挙げてみたい。

1 『知っていそうで意外と知らないを大切に』

理科授業の大きな特徴と言え、やはり実験だろう。しかし、私は、授業の最初から「今日はこんな実験をやるよ。それでは、やり方説明するね。」とは絶対にしたくない。「メダカの学習」を行うのであれば、「じっくり観察したい!」「メダカをよく見たい!」と子供たちに思わせ、心に火を点けることが一番大切だと思っている。そうだとすると、教師の第一声は「今日はみんなでメダカを観察するよ。」とはならない。例えば、いきなりノートにメダカを描かせる。子供たちは「あれ、ひれはどうなっていたっけ。」「口ってどうなっていたっけ。」と確かめたいという意欲が自然に沸き起こってくる。教師が言わなくても、「観察してきていいですか?」と元

気な声が飛んでくるであろう。

2 『子供全員が参加者に』

次は、全員を同じステージの上で授業に参加させるということである。

ノートをきれいに写すことがその日の一番大切な作業になっている児童。班の友達が楽しそうに実験しているのを笑顔で見ているだけの児童。実験器具をいじっていてやるべきことを見失っている児童。様々な様子の児童が教室には混在している。しかし、そのような児童の交通整理をし、進むべき道にしっかり軌道修正することが教師の役目だと考えている。その日の実験内容を、「自分の問題・確かめたい課題」として意識させることができるか、実験に入る前までが勝負である。

例えば、「下の図のような場面に出合ったとき、A・Bどちらが岩を動かせるだろうか。」などと二択で問いかけ、一人一人に予想させ、話し合わせることで子供たちは自然と引き込まれていく。自分の答えがノートにあると、それが正解なのか知りたくなる。友達の言っていることや、実験の結果が気になって仕方がない状態になる。

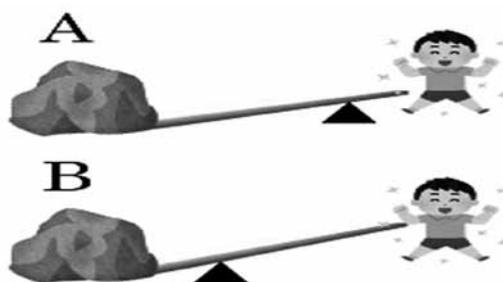


図1：岩を動かせるのはどっち？

3 『あえて、良き理解者にならない』

授業において、自分の考えをみんなの前で説明する場面がある。そのようなとき私は、良き理解者にはあえてならないようにしている。「その子が一生懸命発表しているのだから、わかってあげないと。補足説明をしてやろう。」と考えるのではなく、「先生も一緒に聞いてわかろうとしている。でも今一つ理解できていない……。」という表情で子供たちに返す。そうすると理解したであろう子供たちが、得意気に前に出てきて「だからあ〜」と説明を始める。そうやって始まる補足説明は、驚くほど真剣にみんなが聞いている。私の教室では、「先生だけがわかってないじゃん。」と笑いながら言われることがよくある。

また、子供の発表を聞きながら、「うん、うん、わかるよ！ そうだよね！ つまり〜」といった反応をいつもしていると、次第に先生の解説待ちの状態や、友達の説明を一生懸命に聞く必要性がなくなってしまうといった心理が働いてしまうので、気を付けている。

4 『失敗だって大切な勉強』

教師が行う予備実験は非常に大切である。それは安全面での教師側の心の準備であるし、何よりも実験がきちんと成功するということが重要事項だからである。

そうして臨んだ授業でも、上手くいかない班や、やり方を間違えてしまう班が出てくる。そのようなとき私は笑顔で、「こんな結果になることもあるんだね！」と、まるで新発見があったかのように声を掛け、なぜそうなったのか一緒に考えるようにする。すると他の班の子供たちが原因探しをしようと、いろいろと手順や間違えそうなところをチェックし始め、ミニ相談会が始まる。

実験を成功させることも大切だが、失敗の

原因を探り、その原因がわかったとき、それはまた「新たな学び」となることを、実感させながら子供たちと歩んでいる。

「先生、悔しいから休み時間にもう一回やってもいいですか？」、「前の時間に失敗したから、今度は慎重にやろう！」などと、前向きな言葉が聞こえてくる教室は、活気に溢れ、生き生きと学ぶ姿がたくさん見られる。

5 『器具を扱う経験も全員に』

実験を行っていく上で、もう一つ私が大切に行っていることは「実験器具の扱いを全員に経験させること」である。実験は授業時間との戦いとなることもあるが、教師の都合のために子供たちの経験の場を無くしてしまうことは極力避けたい。ピペットの持ち方や、液の取り方も、意外とできない子供が多い。いつも元気で積極的な児童、しっかり者でリーダーシップを取って動ける児童が、多くの手順をやっけてしまいがちになり、遠慮がちな子は見ているだけ、という場面もよく見る光景だが、全員一度は必ず作業に参加させるように条件を付けて行うことでそれを防いでいる。中学校に進んでも重要となる、器具操作の技術や知識も、小学校できちんと全員が身に付けた状態で送り出したい。

おわりに

今回挙げた五つの内容は、基本中の基本であろう。私はその基本をていねいにやっていきたい。そして、毎日ある授業だからこそ、子供たちにはやる気をもって楽しく取り組んでもらいたい。

これからも、教材研究と授業の技量を上げ、出会う子供たち全員の「学びたい」という気持ちに火を点けていきたい。



ICT機器を活用した授業実践と 授業改善の取組



船橋市立御滝中学校主幹教諭 やたべ けんいち
谷田部 健一

1 はじめに

船橋市内の中学校2校の勤務を経て、平成27年度に船橋市総合教育センターに異動となった。センターでの主な業務内容は「市内小・中・特別支援学校における教育の情報化の推進」であり、所属していた4年間で実施した事業の一つとして、「市内中学校全普通教室への電子黒板の導入」が挙げられる。電子黒板と併せてデジタル教科書（5教科3学年分）と教材提示装置も整備し、「自分が学校にいたら、どのような授業ができるのだろう」という思いを抱きながら、現場の先生方に使い方を説明していた頃を懐かしく感じる。

平成31年4月に船橋市立御滝中学校に異動となり、遂にその思いを自分の授業（数学科）で実現・実行できることとなった。ICT機器を活用した授業実践と併せて取り組んだ授業改善について紹介させていただく。

2 授業改善の取組

(1) ICT機器の活用

授業でICT機器を活用するメリットは、「①指導にかかる時間の削減、②授業準備の簡略化、③生徒の目線を集める・焦点化」の3点にあると捉えている。

①指導にかかる時間の削減について

デジタル教科書を使えば、文章題の問題文を黒板に板書する時間はほぼゼロとなる。複雑なグラフや図形なども、教科書やプリントと同じものであれば簡単に表示することができる。計算練習の場面であれば、答

え合わせのために1問ずつ読んだり書いたりしなくても、全ての解答を一度に示すことができる。このように、これまでと同様のことが短時間で行える場面を狙ってICT機器をうまく利用することで、限られた授業時間の中に、新たな活動を加えることができるようになった。昨年度は生徒の実態から、一人一人のノートを見て個別に助言するために、机間指導の充実を図った。

②授業準備の簡略化について

中学校は教科担任制のため、授業内容によってはたくさんの道具を持って授業教室に移動することがある。そこでICT機器を活用することで、持ち運ぶ道具を減らせないかと考えた。その一例として、関数領域や図形領域では、教室に常設してある教材提示装置を活用した授業に取り組んだ。

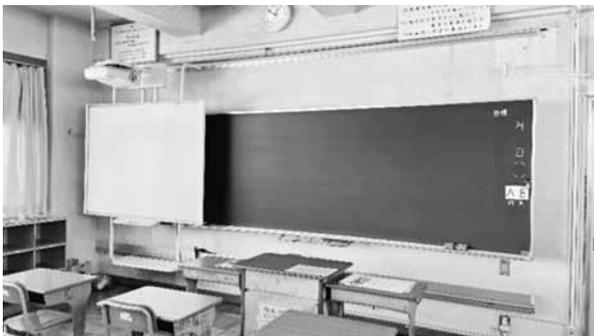
生徒に配付したプリントに、生徒と同じコンパス・三角定規を使ってグラフや図形を作図し、その様子を教材提示装置で電子黒板に映す。これは方眼黒板や教師用のコンパス、三角定規を用いて黒板でやり方を示すよりも、生徒と同じプリントに、同じ道具で示す方がより伝わるのではという思いからだが、結果として教師も生徒と同じものだけを準備すれば済むので、授業準備の簡略化や、持ち運ぶ道具の削減へと繋がった。

③生徒の目線を集める・焦点化について

デジタル教科書にはアニメーションを取り入れたコンテンツや動画教材など、動き

がある教材が豊富に用意されている。これらはわかりやすく伝えるために準備されたものであるが、授業への関心が低い生徒の興味を引くことに対してもとても有効で、特に導入場面では非常に重宝した。デジタル教科書以外はほぼ使用しなかったが、教科によってはインターネット上にあるコンテンツも有効だろう。

また、デジタルならではの良さとして「容易に拡大・縮小できる」ことも挙げられる。とても単純な操作なのだが、拡大することで「どこ」に注目させたいのかが明確になるため、焦点化には大変有効である。教科や単元によっては、縮小する（広い範囲を見せる）ことで、全体像から特徴や共通点などを考えるとといった活動もできるであろう。



船橋市に導入された電子黒板

(2)脱・教授型授業を目指して

新学習指導要領で示された「主体的・対話的で深い学び」の実現を自分なりに解釈したとき、「脱・教授型授業」という言葉が頭に浮かんだ。

多様な価値観が存在する社会において、お互いを理解し、認め合うためには「対話」を始めとした様々なコミュニケーション能力が必要になるだろう。そういった力を育むことを目標に、まずは自らの授業改善に取り組んだ。

具体的には知識を得る時間と、得た知識を活用して問題解決に取り組む時間とで、明確にスタイルを変えて授業を行った。

問題解決の時間では、生徒同士で話し合い、学び合うことを推奨した。「分からない問題に一人で黙って取り組んでも、解決は難しいであろう。そうであるならば、近くの級友同士で話し合い、アイデアを出し合い、チームとして解決しなさい。」と何度となく話し、生徒同士で話し合うことを意図的に促した。生徒からも、「他の生徒と協力して問題を解く時間があり、その時間があってのおかげで自分自身の理解を深めることができた。」という前向きな感想を得ることもできた。

今後は生徒用のパソコンを教室に持ち込み、電子黒板で発表（アウトプット）まで行うような授業にも取り組んでいきたい。

3 おわりに

これまで私は「教師＝指導者」という考えのもと、様々な教育活動に取り組んできた。そして指導者という言葉には、「教師から生徒に一方的に知識や技能を伝達する」という、少し偏った印象を持っていた。

しかし、知識を得るだけの、いわゆる「教授型」の授業では、変化の激しいこれからの社会で活躍できる人間の育成はできないと、今では考えている。

これからは、生徒自らが主体的に学ぶ態度や、対話などの言語活動を通して問題解決に取り組む姿勢を身に付ける授業の実現を目指していきたい。そのための一つの手段として、今後も授業でICT機器を活用していきたい。そして自らの授業改善へとつなげていきたい。